日本メキシコ外交関係 135 年の歩みと展望
ー新たな地平の開拓を目指して

福嶌 教輝（在メキシコ大使）

メキシコは、日本にとって常に外交の地平を開いてきた重要なパートナーである。この機会に、読者の旧聞に属すことも多いと存ずるが、まずは両国の長年に亘る友好と協力の歴史を概観することとしたい。

400 年を超える交流

両国の外交関係樹立は 1888 年で本年（2023 年）に 135 周年を迎えるが、交流の歴史は 400 年以上も前、1609 年にフィリピン総督代理ロドリゴ・デ・ビベロ一行を乗せた船が、メキシコ（当時のヌエバ・エスパーニャ）への航海中に難破し、千葉県御宿沖に漂着したときに遡る。地元民は、寒さと不安に震える 300 人以上の遭難者たちを素肌で暖め救ったと伝えられている。翌 1610 年、徳川家康が寄贈した船で一行は無事メキシコに到着し、このサン・ブエナ・ベントゥーラ号は初めて太平洋を渡った日本の船となった。現在、御宿町のメキシコ記念公園には、この史実に関連して、「日西墨三国交通発祥記念之碑」（1928 年設立）や、2009 年の日墨交流 400 周年にメキシコ政府から寄贈されたメキシコ人芸術家の作品「抱擁の像」等が設置されている。

また、1614 年には、仙台藩主伊達政宗の命を受け、支倉常長を団長とする慶長遣欧使節団が、日本がメキシコに派遣した最初の外交通商使節団として渡墨。メキシコ市には、同使節団の一部が洗礼を受けた教会や宿泊したとされる建物が今でも残っている。

写真1：御宿漂着を画いた「サン・フランシスコ号乗員遭難救助」
（作：松本勝哉）

135 年の外交関係

それから約 300 年後の 1888 年、日本は、ラテンアメリカ（中南米）でペルーの次にメキシコと外交関係を樹立した。このきっかけは、金星の太陽面通過観測のため 1874 年に来日したメキシコ天体観測団であった。コバルビアス団長は日本側の待遇に感激し、本国への報告書で日本の文化や歴史を紹介するに留まらず、メキシコ政府に対し日本と外交・通商関係を結んだ場合のメリットを説いたとされ、これも契機となり、1888 年に日墨修好通商航海条約が締結され外交関係が樹立された。これはメキシコにとってアジアの国との初めての条約であっただけでなく、日本にとってアジア以外の国との初めての平等条約であり、当時、欧米列強との不平等条約に苦しむ日本にとって、そしてその後の日本外交にとって、不平等条約の見直しや他国との平等条約の締結に繋がったという意味で大きな意義を持つものであった。明治政府は感謝の証として、現在も在京メキシコ大使館がある土地を提供し、メキシコは永田町に唯一大使館を構える国となっている。

その後、両国は困難な時にこそ助け合ってきた。お互い世界有数の地震国として、正に 100 年前の関東大震災時には、メキシコは、国内の革命直後で政情不安定かつ経済的に困難であったにもかかわらず、いち早く多額の義捐金を送った。1985 年のメキシコ大地震では、日本は、義捐金寄付・機材供与や専門家派遣のほか、メキシコ国立防災センターを無償資金協力により設立し、以降技術協力を長年行ってきた。最近では、2011 年東日本大震災や 2017 年メキシコ中部地震での相互支援が記憶に新しい。

また、メキシコ革命（1910 ～ 17 年）時には、当時の堀口九萬一臨時代理公使がクーデターに追われるマデロ大統領一族を庇護し、2015 年にメキシコ上院議会がこの史実に関して日本国民・政府に感謝する決議を採択し、上院の中庭にはこれを顕彰するプレートが飾られている。このように、両国は長い年月をかけて、友好協力関係を築いてきた。

昨年 125 周年を迎えた日本人メキシコ移住

日墨関係を語る上で、日系人の方々の存在への言及

は欠かせない。メキシコへの日本人移住は、1897年、チアパス州に到着した榎本移民が始まりであった。これは、中南米への初の組織的な日本人移住である。メキシコ政府の依頼により、今ではメキシコ市を中心に多くの都市の風物詩となったハカランダの木を桜の代わりに導入した松本辰五郎や、メキシコ革命後、第二の故郷である同国の平和と発展を祈り、損害賠償請求権を放棄した一部の日系人団体等、日系人の貢献は日墨友好協力関係の礎となってきた。今日では、メキシコに在住する日系人は7.6万人以上と推定される（ブラジル、ペルーに次ぎ中南米第3位）。1956年に創立された日墨協会等のメキシコ各地に所在する日系人団体や、両国の架け橋となることを目的として1977年に日本政府の支援を受けて設立された日本メキシコ学院等は、日墨友好関係の強化に寄与している。

写真２：米州大陸初の日系人学校「アウロラ小学校」（1905年設立、チアパス州）（出所：「移民調査報告第十二」）

日墨経済連携協定（EPA）

2005年に発効した日墨EPAは、日本にとって初めての本格的なEPAであり、メキシコとの交渉の経験が日本のその後のEPA交渉につながった。同協定発効後、2010年代には自動車産業を中心に進出日本企業が急増し、今日では発効前の4倍超である約1300社（中南米で最多）がメキシコに進出し、メキシコへの累計外国投資額は、米、西、カナダに次いで日本が4位である。そして、進出日本企業の急増を受けて、その約半数が密集するバヒオ地域を管轄する日本国総領事館が2016年にグアナファト州レオン市に新設された。

また、2022年の両国間の貿易額は日墨EPA発効前の約3倍に拡大し、日本は世界2位のメキシコの農水産物の輸出先となっている。日本が輸入するアボカドの約8割、アスパラガスの約8割、カボチャの約5割、生鮮・冷凍クロマグロの約9割がメキシコ産である等、日本の食卓を彩っている。

こうした日墨経済関係の緊密化の背景として、同協定により設置され、ビジネス環境の改善に向けた官民合同の定期的な協議の機会となっているビジネス環境整備委員会が重要な役割を果たしている。

現状及び今後の展望

ここまで日墨関係の歴史を見てきた。強固な繋がりにより、要人往来が頻繁に行われており、2000年以降の皇族・首脳級の往来だけでも、2002、2004年の小泉総理、2006年の皇太子殿下、2012年の野田総理、2014年の秋篠宮同妃両殿下、安倍総理、2001、2003年のフォックス大統領、2008、2010年のカルデロン大統領、2013年のペニャ・ニエト大統領等がある（いずれも当時の肩書）。本年1月には、林外務大臣が今年初めの外国訪問先としてメキシコを訪問した。こうした要人往来は、コロナ禍が落ち着いた今、両国関係の更なる強化に向けて再活性化していくであろう。ここからは主に現状及び今後の展望について述べる。

写真３：「第４回世界水フォーラム」（2006年）への皇太子殿下御出席（於メキシコ市）（水フォーラム事務局提供）

国際場裏での連携

日本とメキシコは、自由、民主主義、法の支配等の基本的価値を共有し、国際社会が直面する諸課題に共同で対処する戦略的グローバル・パートナーである。国際秩序の根幹を揺るがすロシアによるウクライナ侵略等の世界の平和と安定に関わる問題や、気候変動等の地球規模課題について、両国が協力して対応することが求められる。また、日本が推進している「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」の理念に基づき、両国を繋ぐ太平洋が自由で公正な経済秩序の下で更にダイナミックな成長の波を享受できるよう、そして法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の下で国際社会の平和と繁栄を目指し、国際場裏で一層緊密に協働していくことが重要である。

経済関係

二国間 EPA に加え、両国は、環太平洋パートナーシップ協定（TPP）から米国が離脱した後、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）交渉を主導し、メキシコが 1 番目、日本が 2 番目の批准国となる等、同協定の早期発効に貢献した。同協定は、21 世紀型の新たなルールを構築し、アジア太平洋地域の発展に寄与するとともに、戦略的な意義を有する。また、両国は、世界貿易機関（WTO）等のマルチの枠組における連携を含め、世界の自由貿易を牽引していくことが期待される。また、近年、米中の戦略的競争、ロシアによるウクライナ侵略、北米自由貿易協定（NAFTA）に代わって 2020 年に発効した米墨加協定（USMCA）等を背景に、サプライチェーンの強靭化や再編の重要性に対する認識が高まり、米国市場向けニアショアリングの候補地としてメキシコが注目されている。例えば、今年 2 月、テスラ社による世界で 5 か所目、米国外で 3 か所目となる巨大な生産拠点のメキシコでの建設が発表された。このようにメキシコへの追い風が吹く中で、日本企業による同国への更なる投資が期待される。

なお、今年 3 月、メキシコにおける日本産精米の輸入が解禁された。メキシコでも日本食ブームが起きており、メキシコ国内で現在約 1000 軒あると推定される日本食レストラン数は増加傾向にあり、日本産精米を含む日本の食材や日本食の更なる普及が期待される。

開発協力

日本は、今年にメキシコでの事務所開設 50 周年を迎える国際協力機構（JICA）を通じて、また、草の根無償資金協力や国際機関を通じて、メキシコに対する開発協力を行い、同国の経済社会開発に貢献してきている。特に、両国には地震が多いという共通点があることから、防災・災害対策分野での協力が長年に亘り行われてきている。メキシコは、高中所得国と呼ばれるまでに経済成長を遂げている一方、大きな社会格差・貧困問題を依然として抱えている。日本としては、国内産業強化や貧困対策に資する協力を通じて、メキシコの発展に寄与する協力を引き続き実施していく。また、2003 年に締結された「日墨パートナーシップ・プログラム」に基づき、他の中南米諸国が抱える域内共通の開発課題に日墨協働で取り組む三角協力（南南協力）が行われており、今年、同プログラムの 20 周年を迎える。

科学技術・学術交流・文化交流

科学技術分野では、メキシコは、昨年と今年、日本の NPO「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム（STS フォーラム）」と連携して「STS フォーラム中南米カリブ地域ハイレベル会合」を主催した。今年は初の対面会合となる第 2 回目が開催され、エブラル外相（当時）は開会式と閉会式に出席し、閉会式では林外務大臣がビデオメッセージで挨拶された。同会合では、日本及び中南米カリブ諸国等の政府、経済界、

ARTICULISTA INVITADO

YOSHIMASA HAYASHI

135 años de águila y sol

México siempre ha abierto el horizonte de Japón.

El Tratado de Amistad, Comercio y Navegación, concluido hace 135 años en 1888, fue para Japón el primero en términos de igualdad con un país no asiático y condujo a la celebración de tratados de igualdad de este tipo con otros países. Hace unos 125 años, llegó a México el primer grupo de inmigrantes japoneses a Latinoamérica. Más recientemente, el Acuerdo de Asociación Económica (AAE) entre Japón y México, que entró en vigor en 2005, del cual participé en las deliberaciones parlamentarias como presidente de la Comisión de la Cámara de Consejeros, fue el primer AAE a escala entera para Japón.

Tras la entrada en vigor del AAE, el número de empresas japonesas en México se cuadruplicó. En el contexto del fortalecimiento de cadenas de suministro y *nearshoring-friendshoring*, en Japón crece el interés por invertir en México. Con el mayor desarrollo del entorno empresarial a través de los Comités en el marco del AAE, y el avance de los esfuerzos del gobierno mexicano en materia de cambio climático, se espera una mayor profundización de relaciones económicas, incluido un nuevo desarrollo a través de la transfor-

Además, Japón y México son socios estratégicos globales con valores básicos compartidos, y han estado profundizando su cooperación en diversos marcos internacionales como el G20, la OCDE, el APEC, el TIPAT, la OMC y la ONU. En la difícil situación internacional actual, nos encontramos en una encrucijada de la historia y es importante profundizar el diálogo y la solidaridad para reconstruir un orden internacional libre y abierto. Como miembro no permanente del Consejo de Seguridad de la ONU a partir de este año, Japón está cada vez más comprometido al respecto.

El Programa de Cooperación para la Formación de Recursos Humanos en la Asociación Estratégica Global JP-MX que cumple medio siglo en este año ha beneficiado unos 5 mil becarios de ambos países convirtiéndose en colaboradores del intercambio entre ambas naciones, así mismo entre Japón y Latinoamérica.

La Cumbre de Rectores JP-MX, que celebró su quinta edición en 2022, ha fortalecido

Japón y México son socios estratégicos globales, así como países con valores básicos compartidos.

EFE/DAL

Yoshimasa Hayashi, ministro de Asuntos Exteriores de Japón

STS (Foro Internacional sobre Ciencia y Tecnología en la Sociedad y Futuro de la Humanidad) que se viene llevando a cabo en Japón y en el que llevo mucho tiempo participando, el canciller Ebrard también ha estado presente desde que era jefe de Gobierno de la CDMX y en 2022 se celebró el primer Foro STS Amé-

La comunidad Nikkei (descendientes japoneses) en México ha estado estrechando los lazos de confianza y amistad durante generaciones, como un importante puente entre los dos países.

El primer encuentro entre ambos países fue hace unos 400 años cuando un galeón que navegaba por el Pacífico naufragó y su tripulación fue rescatada por pescadores japoneses. Para que el Océano Pacífico que une a nuestras naciones disfrute de una ola aún más dinámica de desarrollo bajo un orden económico libre y justo, basado en la visión del Indo-Pacífico Libre y Abierto (FOIP) que Japón propone y cuenta con el apoyo sólido de México, y para la paz y la prosperidad de la comunidad internacional, espero que Japón (sol) y México (águila), como en la moneda mexicana, permanezcan firmemente unidos por siempre y para siempre. ●

Ministro de Asuntos

写真 4：今年訪墨時の『エル・ウニベルサル』紙への林外務大臣寄稿（表題「135 年の鷲と太陽」）

学界等から約600名が参加し、気候変動対策、医療、災害対策等における科学技術・イノベーションの重要性や可能性について活発な意見交換が行われた。

学術交流では、本年50周年（50期派遣）を迎える「日墨グローバル・パートナーシップ研修計画」が特筆される。同研修は、1971年に開始された中南米で唯一かつ世界でも数少ない政府間の研修・留学プログラムであり、参加実績は双方合計で約5000人に及び、官庁、地方自治体、民間企業・団体等の両国各界で活躍する多くの人材が参加し、交流を支える力となっている。また、両国間には定期的に大学学長等が一同に会する「日墨学長会議」が存在し、そのおかげもあり学術協定数は中南米の中で一番多く、増加傾向にある。昨年に第5回目が日本で行われ、2024年にはメキシコで第6回目が開催される予定である。

また、両国は多くの世界遺産を有し、食文化は無形文化遺産に登録されており、観光の面でもお互いを魅了している。昨年には中南米で初めて日本政府観光局（JNTO）事務所がメキシコに開設された。昨年以降、新型コロナウイルスの影響により減少していた双方向の訪問者数は回復傾向にある。約3年間運休していたアエロメヒコ社の直行便は今年の3月に再開され、コロナ禍においても運航を継続した全日空の直行便と合わせ、人的交流の再活性化が期待される。

以上、日墨関係の現状及び今後の展望について簡潔に述べた。メキシコは、6年に一度の大統領選挙を来年に控え、これから政治の時期に入るが、今年1月の訪墨時に林外務大臣が現地主要紙に寄稿したように、長年にわたって培われ成熟した両国の友好協力関係を礎に、戦略的グローバル・パートナーとして、「メキシコの硬貨に描かれた鷲と太陽のごとく、いつでも、そしていつまでも、日本（太陽）とメキシコ（鷲）が堅く結びついていくこと」を願っている。

（ふくしま のりてる　在メキシコ日本国大使）

ラテンアメリカ参考図書案内

『メキシコ古代都市の謎 テオティワカンを掘る』

杉山 三郎　朝日新聞出版（朝日選書）
2023年6月　199頁　2,000円＋税　ISBN978-4-0226-3125-1

紀元1～6世紀にメキシコ中央高原テオティワカンに栄えた古代都市は、壮大な建造物で知られるが、元愛知県立大学名誉教授で、米国アリゾナ州立大学で博士号を取得した著者は43年間にわたってこの遺跡の調査を続けてきた。

「月のピラミッド」「太陽のピラミッド」「羽毛の蛇のピラミッド」の長年にわたる発掘調査で明らかになったことから、この計画的都市を造った住民の世界観は何だったのか？ その優れた天文学の知見や図像の表現性、暦の解析と三大ピラミッドの建築基準を突合することによって、ピラミッドも単に神殿の基壇ではなく地下界と天上界の出入り口、生死に関わる儀礼の場であったこと、中心建築群が天体の動きと暦の大周期を反映していることなどを明らかにしている。王権の象徴として建立された「羽毛の蛇のピラミッド」の更改から権力の分散化、衰退、戦争と王権、社会の変化を知ることができることなど、メソアメリカ考古学の面白さを縦横に語っている。

本書は著者も監修者として参画した2023年6月16日～9月3日の間、東京国立博物館平成館で開催の特別展「古代メキシコ ―マヤ、アステカ、テオティワカン」に合わせて上梓されたもの。

〔桜井 敏浩〕